

『まいこばなし』

※スパークスのボトムアップ・リサーチを通じて、
MY小話として舞妓さんが日本株の情報をお伝えします。
スパークスの日本株の情報発信レポート

第58号(2011年4月1日)



「アナリスト・レーティング」

3月20日の日経ヴェリタスで23回目となる日経アナリストランキングが発表されました。メディアなどで「人気アナリスト」とか「トップアナリスト」などと表現されることがありますが、それらはこのアナリストランキングが基になっています。アナリストというと証券会社に所属するアナリストと機関投資家の組織(生命保険、信託銀行、アセットマネジメントなど)に所属するアナリストがいますが、アナリストランキングの対象となるのは前者の証券会社に所属するアナリストです。

このアナリストランキングは機関投資家の運用担当者などへのアンケートを集計する形で決定されます。つまり機関投資家所属のアナリストはランキングに投票する側です。我々スパークス・アセット・マネジメントも機関投資家の一社として運用担当者がアンケートに返答しています。

証券会社のアナリストの役目は産業構造や企業財務の分析を通じた情報発信ですが、その中でも最も期待される情報は株価を評価して付与する「レーティング」です。この「レーティング」とはある一定の投資期間(多くの会社の場合は12ヶ月間)を想定した場合、今が「買い」か「売り」かという投資判断です。

では投資家はこのアナリスト・レーティングをどのように利用したら良いのでしょうか。アナリストが買いと言っている銘柄を買ったとして本当に儲かるものなのでしょうか。また「買い」と言っているアナリストがいる一方で「売り」と言っているアナリストがいる場合、どちらの意見に耳を傾ければよいのでしょうか。ブルームバーグなどの金融情報端末を利用するとアナリストレーティングの平均値やレーティングを付与しているアナリスト数をみることができますので、そのデータを見てみましょう。



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。



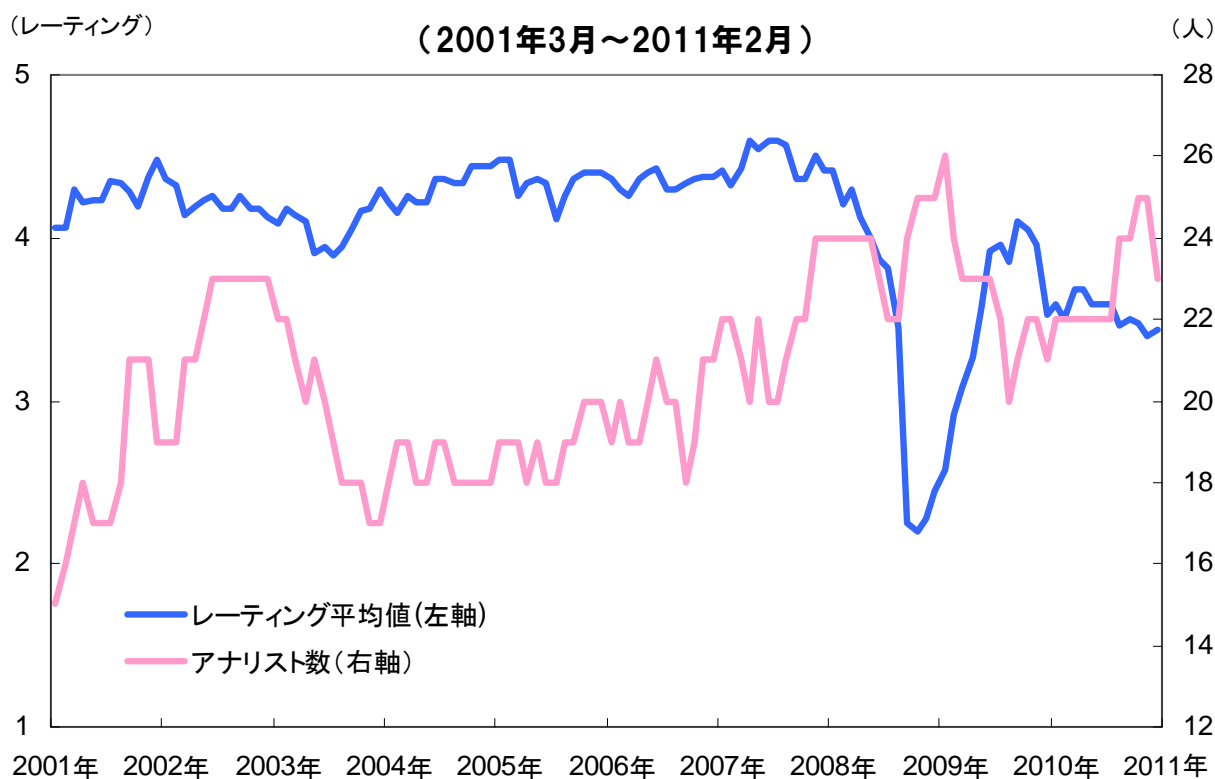
『まいこばなし』

スパークスの日本株の情報発信レポート



下の図は、ある大手自動車株についての過去約10年間のレーティング平均値(1が最低値、5が最高値)とアナリスト数の推移を見たものです。これを見るとレーティング平均値は2001年から2008年半ばまで最高値の5に近い4~4.5で推移していましたが、金融危機が起こった2008年に急落しました。その後この値は4を越えるまでに回復しましたが2010年初めに発生したリコール問題とその後の販売伸び悩みを受けて今に至るまで評価が低迷しています。一方のアナリスト数を見ると趨勢的に右肩上がりで増えているのが見て取れます。その中で2003年や2009年などは一時的に減少していますが、この期間は日本の株価が下落し証券会社で雇用調整が行われた時期にあたります。

大手自動車株のアナリスト・レーティングの平均とアナリスト数



出所:ブルームバーグ



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。



『まいこばなし』

スパークスの日本株の情報発信レポート



では、このレーティング平均値及びアナリスト数と株価の関係はどのようになっているのでしょうか。東証上場の代表的な30社(TOPIXコア30指数採用銘柄)で約10年間(2001年3月~2011年2月)のレーティング平均値とアナリスト数の推移と株価の相関係数をそれぞれ見たところ、レーティング平均値と株価は正の相関が強く(30銘柄中19銘柄が正の相関)、アナリスト数と株価は負の相関が強い(30銘柄中21銘柄が負の相関)という傾向が見えました。この結果のみを基に「レーティング平均値が上がった銘柄は買い」「担当アナリスト数が減った銘柄は買い」と単純に結論付けることは出来ませんが、レーティングが上がった銘柄、担当アナリストが減った銘柄、などは注目に値すると言えるでしょう。

また、もともと担当アナリストが少ない銘柄の中に魅力的なビジネスを展開している企業が存在し、注目に値すると思われれます。東証1部上場の企業の中にはレーティングを付与しているアナリストがいない銘柄が4割強もあります。

弊社で運用している日本の小型株に投資するある投資信託を例に取りますと、2011年2月末時点全保有銘柄のうちレーティング付与しているアナリストがいない銘柄が3分の1以上組込まれています。この投資信託は近年パフォーマンスが良好で投資信託評価機関からも表彰されましたが、運用者は他の投資家が注目しない銘柄で魅力的なビジネスを展開している企業に投資を心がけており、それが好パフォーマンスの一因になっていると思います。

人の注目していないものに先んじて注目をして大きなリターンを得るのは投資の醍醐味です。好調なパフォーマンスを続け、日増しに注目度が高まっているアジアの株式市場なども数年前までは世界中の注目を集めるという状況ではありませんでした。特に日本の中小企業はアジアへ舵を切る企業も増えてきています。それにより、先んじて投資した人は今投資のリターンを得られていることでしょう。では、今からアジアに投資をしても遅いのかというと、そんなことはないと思います。国境を越えてこれらの銘柄を先回りして発掘をすることで、数年後には大きなリターンを得ることが可能になるのではないのでしょうか。

※当コラムに掲載された企業は、あくまでも当コラムの内容の理解を深めて頂くためのご参考として掲載したものであり、個別企業を推奨しているものではありません。

※当コラムは執筆者の見解が含まれている場合があり、スパークス・アセット・マネジメント株式会社の見解と異なることがあります。



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。